

# 竹延 哲治さん

## 養豚業界トップクラスの高い生産性 科学する経営で日本の畜産を変える

大阪府四條畷市しじょうなわて  
ファロスファーム株式会社 代表取締役



病気との闘いに悩んでいる養豚業界で、「病気と闘わない」経営をめざす。病原菌の侵入を徹底的に防ぐため、繁殖と肥育の農場を完全に分離し、病気をコントロールしやすくしている。経験や勘頼みではなく、データにもとづく「養豚を科学する」経営で、世界と戦える高い生産性を実現している。日本の養豚出荷シェア2%を視野に入れ、さらなる高みをめざす。

### 養豚を誇れるビジネスに

——大阪府四條畷市の住宅街にあるこの本社の建物は、洗練されていて、カフェカレストランのようですね。  
竹延 創業の地は東大阪市ですが、約20年前までここで豚を飼っていました。いま、ここには本社の建物し

かありません。都市化が進んで公害の問題もあり、効率のいい畜舎を建設するため、鳥取県と広島県に全部移しました。

昔、養豚はきれいな仕事ではなく、私は子どものころ「ブタ屋の息子」といわれ、いじめられたことがあります。その養豚という農業を誇れるビジネスに育てたいという思いが強くなり、それが今日までの私の経営の原点でもあります。

いま、30歳代の若い農場長は養豚に携わっていることを堂々とはいませんが、私が若いころは言えませんでした。それではいけない。この本社の建物も、業界を変えていくという気持ちのあらわれの一つなのです。  
——社名の変更も、その一環ですか。  
竹延 かつては「阪神畜産」でした

が、移転で阪神地域に農場がなくなったのを機に、2018年1月から「ファロスファーム」に社名を変更しました。「ファロス」とはギリシャ語で「灯台」という意味で、日本の畜産の将来を明るくできるよう「養豚業界の灯台」をめざすという思いを込めました。

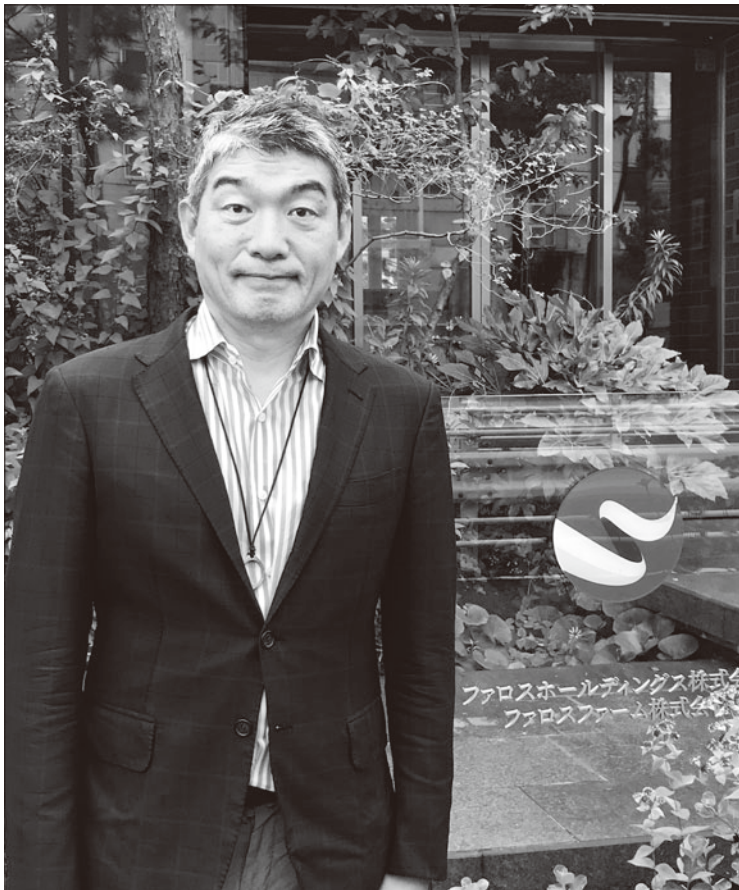
——経営規模は？  
竹延 現在、母豚6300頭、年間出荷頭数は約18万頭です。農場は繁殖農場が広島に2カ所、鳥取に1カ所あり、肥育農場は広島に3カ所、鳥取に1カ所あります。来年の7月には母豚9000頭、年間出荷約27万頭を見込んでいます。

——繁殖農場と肥育農場を分けているのですか。  
竹延 生きものを相手にする以上、

養豚などの畜産は、病気をいかにコントロールするかが、経営のよしあしを左右します。

繁殖と肥育の両方をやる一貫経営の場合、繁殖と肥育の農場がいつしよだと、病気に感染した場合、拡大するリスクが大きい。分離することで感染拡大のリスクを減らせます。いまや分離飼育は一般的ですが、うちは日本では早く、23年ほど前から実施しています。

もし、肥育農場で病気が発生したら、その農場をいったん空にして病原菌のいないクリーン状態にしたことを確認してから、再び飼育するのです。感染の連鎖を防ぐためですが、それには複数の農場が必要です。繁殖農場一つに対して三つの肥育農場がある状態が理想です。



大阪本社前で、代表の竹延哲治さん=大阪府四條畷市

とくに肥育農場では、出荷する際、トラックでと畜場に運び込むため、と畜場の病原菌を農場に持ち込んでしまうリスクが常にあります。繁殖農場と分離しておけば、病気拡大のリスクを減らせます。発生した場合に備えて対応できるシステムをつくらなければならないのです。

——竹延さんは「病気と闘わない」ことをモットーにしていますね。

竹延 「闘わない」とは病気をコントロールするという意味です。病原菌の侵入を許してしまうと、病気と

闘わざるを得ません。侵入を防げば、病気と闘わなくて済みます。畜産という仕事で本当に勝ち抜くには、病気をコントロールできるシステムを作り上げることが必要です。当社は複数の繁殖専門農場と複数の肥育専門農場を持つことで、病気のコントロールを容易にしています。すべての農場で、病原菌がない状態を確保できているのです。

### データで養豚を科学する

——「養豚を科学する」と、竹延さん

は言われていますね。

竹延 この業界に入ったとき、合理的な判断より経験や勘、あるいは感情といったものが優先しているように思えて違和感を覚えました。

豚がかわいいとか、生きものが好きだという感情は結構ですが、そのことと、豚を安全に飼育することとは直接、結びつくわけではありません。感情や経験より、データの正しいかどうかが大切なのです。

以前、豚舎の自動給水機の元栓を工事のため締めたま戻すのを忘れて

て数日過ごし、豚が何日も水が飲めない事故が起きたことがありました。そこで全部の豚舎のタンクに重量計と水量計をつけ、農場や本社の事務所のパソコンからでも見ることでできるようにしました。水の量が減っていないければ、おかしいことがすぐにわかるからです。

その他にも、豚舎には自動化されたさまざまな計測機器があちこちに設置され、意思決定に必要なデータが蓄えられています。データによる管理によって、豚を快適に育てることが出来ます。

どの豚舎の豚がどれだけ餌を食べているか、パソコンですぐにわかるシステムもできています。設備にはお金をかけ、大胆な投資もします。もちろん、導入した設備が生産の効率化につながっているか、費用対効果を引き上げると検証します。

その結果、少人数でのオペレーションによる高い労働生産性を実現しています。現在もつとも力を入れているのは人材育成です。社員を単なる作業員と考えず、知識や技術のインプットにとどまらない研修制度を設け、社員の成長を助けるための投資を惜しみません。大卒の新入社員の初任給は、大企業並みの月額24万円です。それに見合う高い生産

**Profile**  
たけのぶてつじ  
大阪生まれ。59歳。神戸大学経営学部卒業。東京の大手電機メーカーに就職。3年間勤務の後、1987年、父の経営する阪神畜産（現ファロスファーム）に就職。98年に3代目の社長に就任。繁殖と肥育の農場を分離し、病気を防ぎながら経営規模を拡大。欧米に負けない生産コスト低減に挑み、国内有数の養豚経営に。一般社団法人日本養豚協会会長代行。

**Data**  
ファロスファーム株式会社  
戦時中の1943年、大阪府四條畷市で現社長の祖父が創業。72年、阪神畜産を設立。現在、農場は鳥取県内に2カ所、広島県内に5カ所。2018年1月、「養豚業界の灯台」をめざそうと社名を変更。「ファロス」とは、ギリシャ語で「灯台」を意味する。母猪6300頭、年間出荷頭数18万頭と規模は大きく、生産性も高い。売上高64億円。従業員80人。

性を上げてもらっているからです。

——高い生産性とはどのくらいですか。

**竹延** 1頭の母豚が年間、何頭の子ブタを産むかという数字でいうと、昨年は32・7頭でした。業界の平均は22、23頭ですから、業界でトップクラスです。品種改良された優秀な豚がそろっているし、飼いがじょうずで病気を出さないからなのでしょう。また、妊娠させる回数が年間2・55回で、業界平均より多いというところもあります。

——そのほかの生産性では？

**竹延** 競合他社との数字を比較し分析する手法をベンチマーキングといいますが、わが国の主要な養豚業者176社の平均と当社の数字を比べたものがあります。

当社の農場の一つでは、従業員1人当たりの出荷頭数は2569頭で、他社の平均1165頭の2倍以上で、業界トップです。設備1平方メートル当たり何キロの肉を生産するかという設備生産性は、うちは267・1キログラム（業界平均155・4キログラム）です。

豚が1キログラム太るのに必要な餌の量、つまり飼料の変換効率は、2・57キログラム（同3・11キログラム）と少ない。

1頭の母豚から年間何頭の豚を出荷するかという1母豚出荷頭数は、30・4頭（同23・8頭）です。

いずれも業界トップクラスの生産性を誇っています。

### 世界と戦える高い生産性

——外国と比べてはどうですか。

**竹延** 土地利用型農業は耕地の広い米国などとの競争に負けるのはやむを得ないとしても、施設利用型である養豚では、とくに人件費の高い欧州との競争では負けたくないですね。当社の生産性は、欧州の上位3分の1ぐらいに位置し、世界と戦える高い生産性を維持していると自負しています。でも、日本の養豚業界全体の生産性は、欧州より劣っています。——なぜですか。

**竹延** 日本は飼料の購入コストが高いことが第一の理由です。それに、飼料の変換効率が悪い。また、人件費は欧州の方が2・5倍以上高いのに、労働生産性は日本の方が低い。日本には、生きものを飼うための専門教育を受けた優れた従業員が少なくない。加えて、経験や勘が大事にされ、従業員のやっている仕事、どれだけの価値を生んでいるか、きちんと分析する経営者が少ない。

日本の豚肉の価格は、現在、世界

でも高い水準にあります。養豚業者にとつて恵まれた環境であるはずなのに、「井の中の蛙」なのか、世界の中で日本の養豚の生産性がどういう状況にあるのか、しっかり分析し、対応している業者が少ないように思います。

### 日本一食べられる豚肉

——日本で一番たくさん食べられる豚肉を生産することをファロスファームはめざしていますね。

**竹延** 特別な餌を食べさせて育てるブランド肉ではなく、みなさんに日常の食卓で食べていただく豚肉を生産しようという考えです。

ブランド肉は高く売ることができるとはいいませんが、対応できる販路を確保しておかないといけません。当社の豚肉は、脂肪が少なくヘルシー志向に合ったおいしい肉ですが、普通の豚肉です。

私は経営の力点を、ブランド肉の生産ではなく、生産性で欧州に負けないとか、労働生産性をさらに上げることに置いています。育てた豚がいつでも市場で売れる方が、事業家としては楽です。

——生産した豚肉はどの地方に出荷されていますか。

**竹延** 関西、中四国、北部九州が多

いですね。当社の豚肉は脂肪分が少なくヘルシー志向の消費者に好評です。とんかつよりしゃぶしゃぶ向けですね。関東地方にも出荷したいと考えていますが、関東の消費者は脂身に関心が高いなど、豚肉へのこだわりが異なる気がします。

——今後の計画は？

**竹延** 2015年に策定した第1期の5カ年計画は、今年、安芸高田農場（広島県）が完成し、目標をほぼ達成しました。来年から第2期の5カ年計画をスタートさせます。内容は幹部候補生を集めて議論しているところです。

生産規模については、日本の豚肉出荷の2%が当面の目標で、現在の2倍の32万頭ですが、その実現はすでに視野に入っています。

今後は、欧州並みの生産性を実現する当社のデータ経営の実績を、産官学の分野に還元できればと考えています。ファロスファームは、難しい繁殖事業にいつそう力を入れ、中小の肥育農家に子豚を提供するビジネスモデルも考えられます。

今年4月、ベトナムの獣医学科を卒業した高度人材を4人採用しました。当社の養豚経営システムは、外国でも十分戦えると思っています。

（ジャーナリスト 村田泰夫）

